

田所大溝とその周辺

増澤 徹

1. はじめに

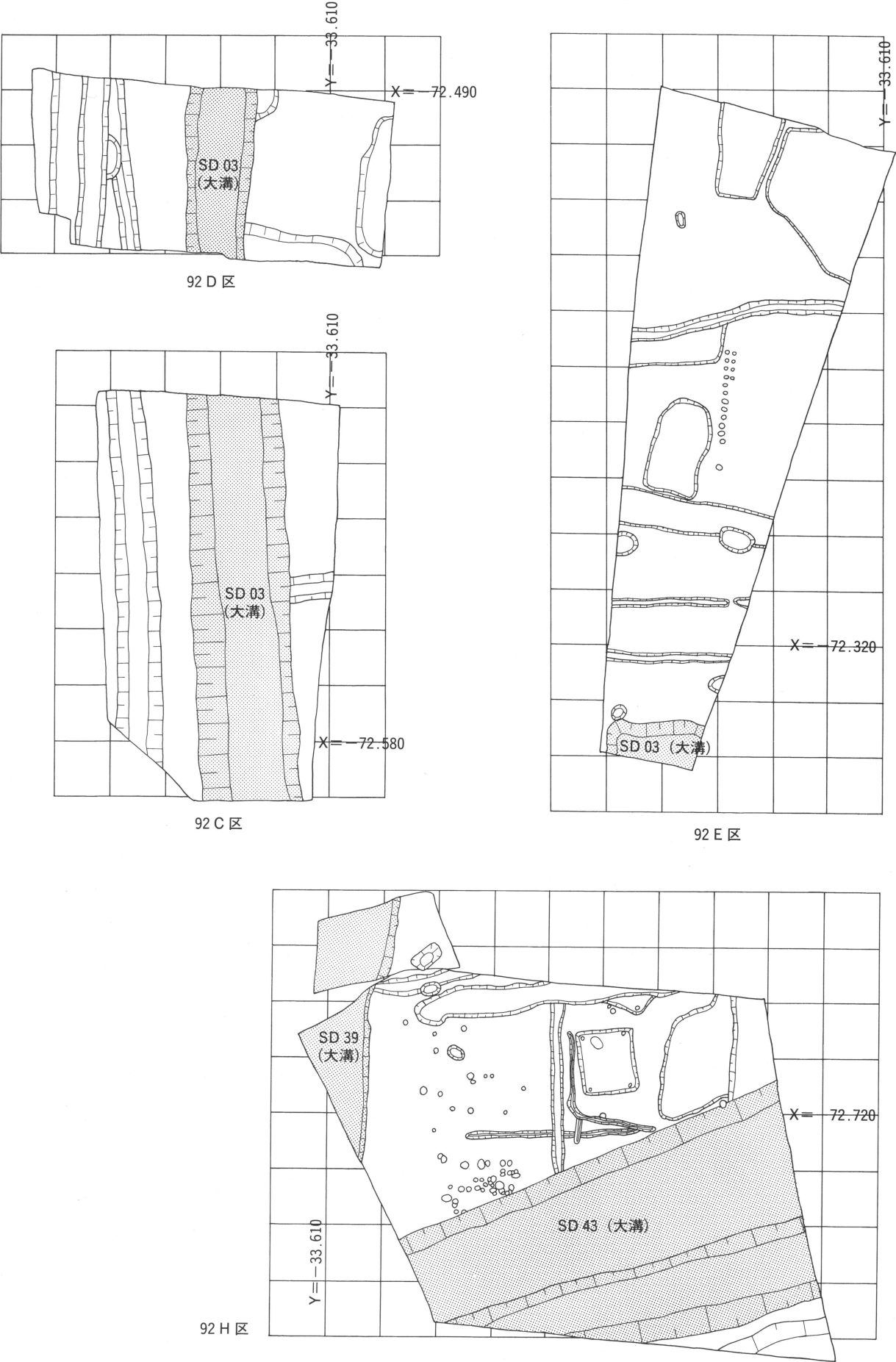
田所遺跡は、一宮市大字田所と隣接する葉栗郡木曽川町黒田にまたがり、木曽川によって形成された自然堤防上および後背湿地に位置している。現況は標高10m前後の水田及び畑地である。東海北陸自動車道の建設にともなう事前調査として、平成4年7月から調査が開始された。

2. 平成4年度の調査の結果—大溝の検出

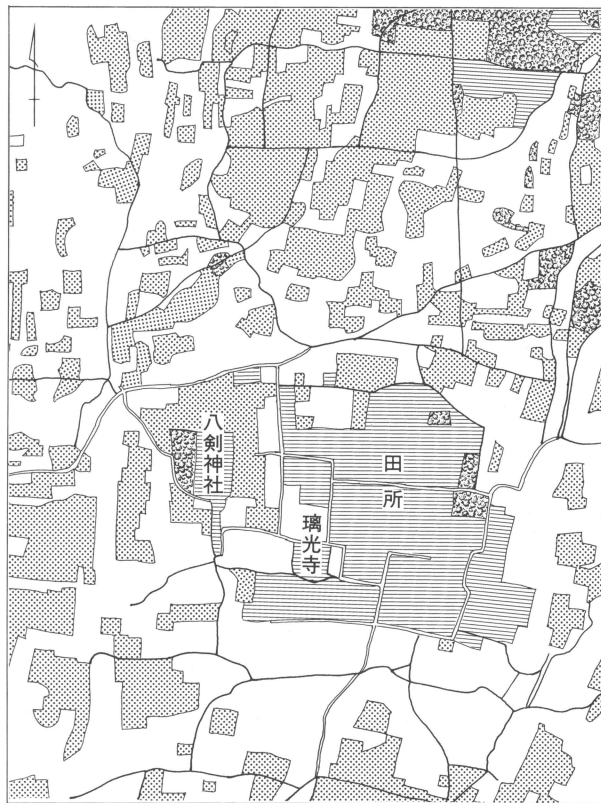
本年度の調査において、92C区と92D区から幅8～10mの南北方向に走る中世（鎌倉時代）の大溝が検出された。また、92H区では南北に走る溝に加えて、東西方向に走る幅約15mの溝が検出された。さらに92E区の南端では、南から東へと屈曲していると思われる溝らしき遺構が検出された



第1図 平成4年度調査区位置図（1：5000）



第2図 92C・D・E・H区遺構図 (1:500)



第3図 田所の土地利用図 0 100 200 m
(明治17年の地籍図より作成)



田所周辺の航空写真

(第2図)。ただ、この中世の大溝と同時期の遺構については、92F・G区で墳墓堂を中心とした13～14世紀の墓域が確認されたものの、大溝に沿った地域では検出されなかった。

3. 田所集落を囲む大溝の推定

前述の92C・D・E・Hの4つの発掘区から検出された大溝は、田所集落との位置関係から考えると、集落を囲む可能性も出てきた。そこで、明治17年の地籍図と、昭和25年に米軍が撮影した航空写真を基に、その位置を推定してみた。地籍図を取り上げたわけは、土地利用の状況が細かく読み取れ、そこから当時の地形が類推されるためである。特に田所は木曾川によって形成された自然堤防と後背湿地が入り組んだ場所に位置しており、古来畑作地としての利用が多かった。寛文12年(1672)頃のすがたを示す『寛文村々覚書』によると、畑・宅地の面積は79.9反であるのに対し、田の面積は20.2反であり、田の面積の割合は20%程度しかない。それが、江戸中期の新田開発及び、水利設備の整備による畑地の田への転換が進んだ結果、明治9年には畑・宅地面積92.4反に対して田の面積95.4反と、田の面積が50%以上の割合を示すに至った。つまり、地籍図に描かれた畑の部分は、中世においても畑か未開墾地であった可能性が高く、地籍図の田の部分に大溝が存在する可能性が高いと思われるのである。一方、航空写真からは、色調の差や模様から微地形が読み取れるので、低地の部分を判読することによって、大溝の位置が推定できると考える。

まず、地籍図を基に作成した土地利用図(第3図)を見ると、田所集落は東西・南北共に約200mの範囲に住居が密集しており、集落の西に村社八剣神社があり、その周囲には畑地が分布している。この住居の密集している部分と神社を含めた畑地の部分を合わせた部分が、自然堤防がほぼ長方形

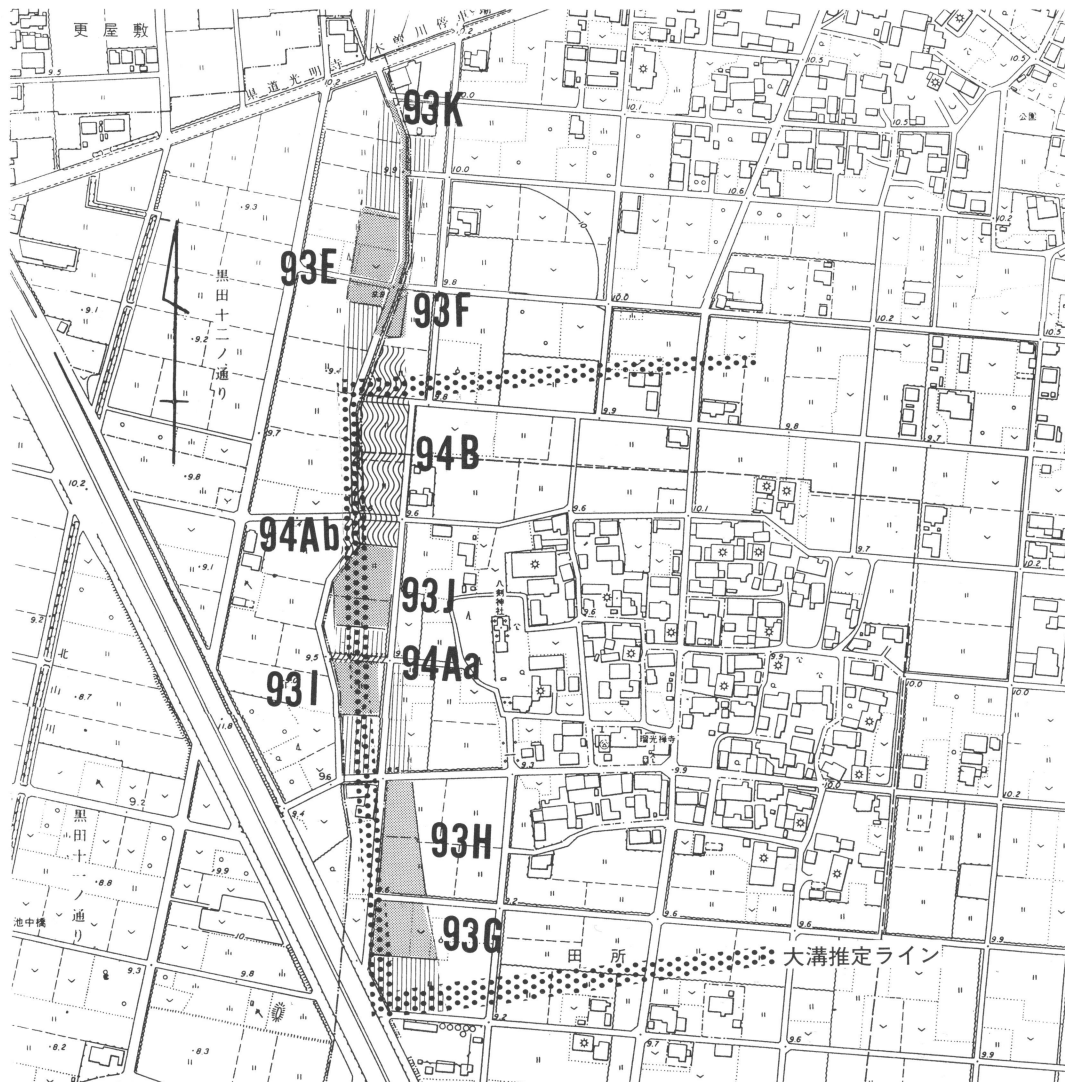
に残存した田所集落である。八剣神社の西側には、ほぼ南北に帯状に水田が並んでいる部分があり、明らかに人為的に造られた地形のように思われる。この帯状のラインの上に、本年度検出した溝を重ねてみると、ほぼ位置が重なることがわかった。次に、東へ溝が屈曲していると思われる部分を重ねてみると、南側では水田が広がっており溝が伸びていく可能性が高いと思われた。しかし、北側では島畑がたくさん見られ、ここからは大溝の位置を推定することはできなかった。

次に、航空写真を見ると、集落の周辺に低地が帯状にいくつか走っているのが読み取れた。特に集落の西側を南北に走るものと、集落の北西角を

北東から南西に向かって走るものが明確にとらえられた。さらに、集落の北側を東西に低地が筋状に走っている様子が読み取れることから、この辺りにも大溝が伸びる可能性があると思われた。

以上の点から、第4図のように大溝の位置を推定した。なお、この溝のことを田所大溝と呼ぶことにした。

さて、大正6年に刊行された『葉栗村志稿』に13世紀頃の田所集落とそれをめぐる堀に関する記述があることが知られている。この記述の基となる古文書が現存しないことから、この記述の信憑性についてはやや問題がある。しかし、参考までにそれを記すと、次の通りである。「屋敷の廣さは



第4図 大溝推定ラインと平成5・6年度調査区位置図 (1:5000)

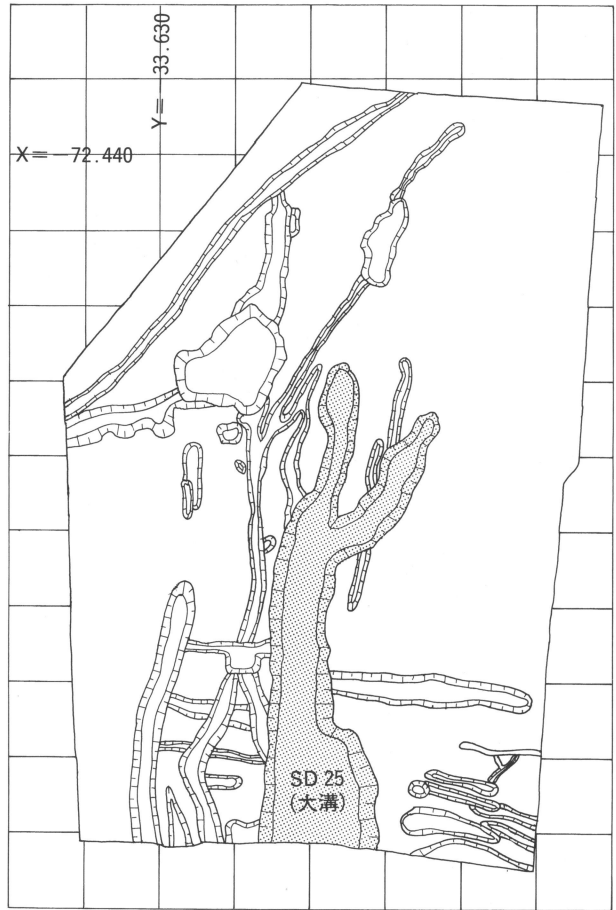
外構東西四町南北五町あり内構は一町平方あり其の周圍に大堀及大土堤を築けり現今田所といふは此の屋敷のとなり。」この記述からは、田所集落の外構の周圍に大堀と大土堤を築いたとも読み取れる。すると、その大堀及び大土堤の大きさは、東西約400m、南北約500mを超える大きさと考えられ、大溝の推定ラインの大きさと似ているのは興味深い。

4. 平成5年度の調査の結果

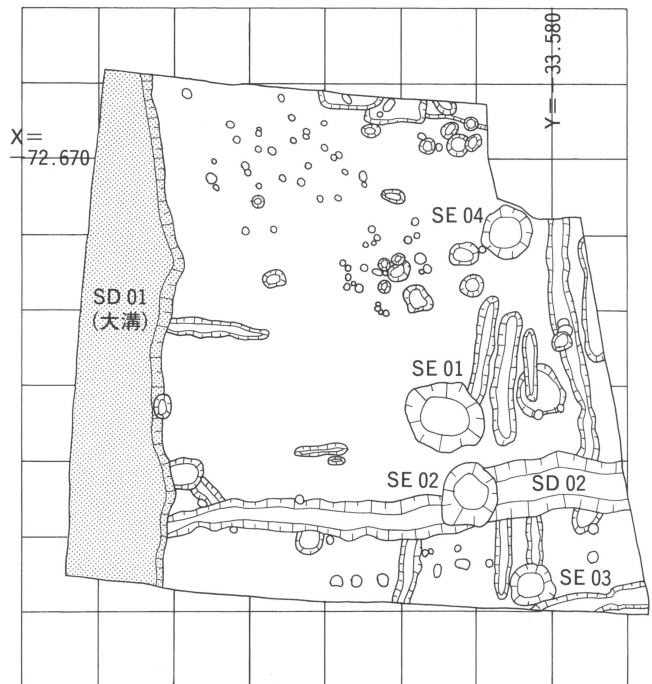
本年度は、93E・F・G・H・I・J・Kの7区の調査を行った。

その結果、93I区において、幅最大8m、残存部の深さ最大約1.5mの大溝が、92C・D区に連続する形で検出された。一方、93J区においても、南の92D区と連続して南北に直線状に伸びた状態で検出されたが、発掘区のはほぼ中ほどで消滅してしまっていた(第5図)。大溝の推定位置と比較すると、南北の長さが100m以上短く、また東へ屈曲している様子も見られなかった。

93G区では、田所大溝と同時期の土坑、井戸、小溝などが集中して検出された(第6図)。井戸は1基重複して5基検出され、そのうち4基に曲物及び木組などの構造物が遺存した。小土坑は百数十基検出されたが、掘立柱建物などは確認されなかった。注目されるのは、十数条検出された小溝である。いずれも東西方向、あるいは南北方向をとっており、田所大溝や田所集落の軸と同一の方向性を示しており、大溝の内側を区画する溝の可能性も考えられる。また、SD02からは13～14世紀の比較的多量の灰釉系陶器が出土した。93G区と同様に田所大溝に近接した位置にある北隣の93H区では、14世紀以降と思われる水田が調査区の中央から北部に広がっていた。しかし、集落に係する遺構は南端部以外は検出されていない。93G区的位置は、溝が集落を方形にめぐっていると



第5図 93J区遺構図(1:500)



第6図 93G区遺構図(1:500)

すると、その区画の中では南西のコーナーにあたり、集落域において特殊な部分にあたるためと考えられる。

5. 平成6年度の調査の結果

本年度は、92D・93I区間の道路部分（94A a区）と、田所大溝が消滅している93J区から北へ向かう地点の94A b・B区の調査を実施した。

その結果、94A a区では田所大溝が連続して検出されたが、94A b区以北は大溝と思われる遺構は検出されなかった。また、一昨年、南北に伸びた大溝が東に屈曲していると予想された92E区の東側からは、遺構検出面のシルト層をつき破り、方形に噴出した砂の層が認められた。その結果、東に伸びる溝は存在しないことが明らかになった。

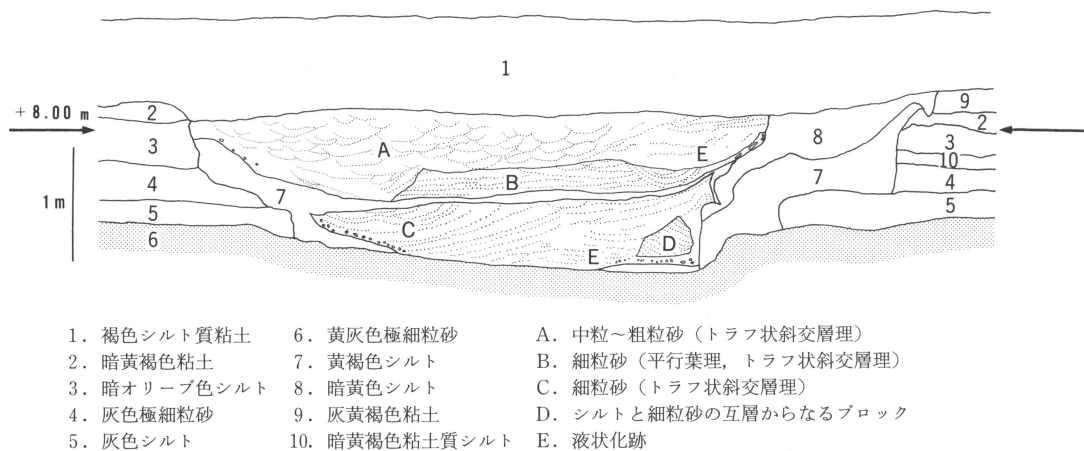
本年度の調査結果より、田所大溝は田所集落を連続して囲む溝ではないことが明らかになった。このことは、大溝には防御の機能があまり必要とされていなかったことを示していると思われた。それでは、この大溝は何の目的で造られたものであろうか。第7図を見ると、大溝の堆積物は、中粒～粗粒砂層（A）、細粒砂層（B）、細粒砂層（C）、黄褐色シルト層（7）、暗黄色シルト層（8）である。シルト層を切る形で砂層が堆積しさらにその上にシルト層が堆積していることから、止水性の

時期と流水性の時期とがあったことがうかがわれる。砂層中には葉理が発達しており、そこからは北から南への流れがあったことが明らかになった。また、92H区から検出された幅約15mの東西の溝も、その葉理から東から西へ向かっての流水性を示す時期があったことが明らかになった。このことは、東西・南北の溝が92H区の西側で合流後、さらに西ないし南西方向へ水を導き、野府川（旧黒田川）へと排水された可能性も高いと考えられる。だとすると、大溝は灌漑用水としての機能を持っていたことが予想される。ただ、用水ならば、水の供給源があるはずである。しかし、今回の調査ではそれははっきりしなかった。

一方、集落の境界としての役割も考えられる。というのも、田所周辺の後背湿地は地下水位が高



93 I 区SD03（田所大溝）



第7図 93 I 区SD03（田所大溝）断面図

く、空堀として掘っても底部から湧水があり、止水性の溝の状況を呈すと考えられるからである。しかし、これについても現状では推測の域を出ない。

6. 田所集落の成立時期

現在の田所集落が、田所大溝と同じ時期に成立した中世村落であったのだろうか。その点について、文献及び聞き取り調査を行った。

(1) 文献より

昭和61年に刊行された『葉栗史誌、神社仏閣編』には、田所集落の璃光寺と八剣神社の沿革が記載されていた。

璃光寺の前身は本寺がなかったので、慶長4年(1599) 笹野の妙光寺の末寺とし、寺号を薬師堂と称した。その後、寛文年中(1661～1672)に璃光寺と寺号を改めたとのことである。

八剣神社は、延喜年中(901～923)に創建されたと伝えられるという記述が見られるが、定かではない。天正12年(1584)に奉勤請願主なりと記載がある。

『織田信雄分限帳(戦国時代)』に「光明寺の内田所の郷内」と見え、信雄の家臣村井専次子・石田孫左衛門子・塙伝三郎子の知行地が合わせて130貫文あったと記載されている。

(2) 過去帳の調査

田所集落の菩提寺である、笹野の妙光寺の過去帳によると、寛永6年(1629)が第1巻であり、それ以前については不明であった。田所集落関係では、寛永9年に「忠右衛門没」の記載があったが、寛永6年以前に「忠右衛門の母、大室妙用禪定尼没」の記載もあり、年代不明ではあるがこれが最も古い記録である。

(3) 田所集落の調査

田所集落は璃光寺の周囲に60戸ほどの家がほぼ長方形に集まっており、集落の西には村社の八剣

神社が鎮座する。天保12年の村絵図(1841)と比べても、基本的な集落の形態にはほとんど変化がない。古くから住んでいる人はすべて臨済宗を信仰しているが、菩提寺は璃光寺ではなく、笹野にある妙光寺である。八剣神社の秋祭りの際にはすべての家から準備のために人が集まるなど、集落の結束は強い。田所集落に古くから住んでいる住民の姓は、小島、橘川、野々垣の3種類しかない。その3つの姓について、本家分家の関係を聞き取り調査により調べたところ、第8図のような関係が明らかになった。

これによると、小島(K o) 橘川(K i) 野々垣(6系統)の流れがとらえられ、時代の違いはあるものの、合計8軒の本家が確認された。本家は分家を出すときは、屋敷の一部を分け与えるのが一般的とのことであり、田所集落は中心部から次第に四方八方へと集落を拡大していったことがわかる。この、本家に当たる家に、古文書、位牌等の、古い年代を表すものについて聞き取りを行った。その結果、N t mには文化8年(1811)、N k・N dには元禄時代(1688～1703)の位牌があった。K iは、独自に位牌や過去帳を調べ、今日まで18代続いており、初代は寛永9年(1632)頃に没しているとのことであった。K oには、古文書が残されていた。それによると、先祖は慶長年中(1596～1614)に清洲城主福嶋正則に仕え、やがて国替えになって安芸国廣島へ随行した。しかし、元和元年(1615)浪人となり、これ以後田所に帰ってくる。帰国後は武士の面目上苗字帯刀の願書を4回にわたり出していることがわかった。

7. 研究の成果と課題

田所遺跡の発掘調査及び田所集落の調査により集落の西側及び南側に、大溝が造られたことが明らかになった。そして、その内側に井戸等の集落に関わる遺構や、一定の方向性を持った溝が存在



第8図 田所集落における本家・分家の関係 (1:2500)

することも確認された。一方、田所集落の成立時期については、文献及び聞き取り調査によって戦国時代までは遡れることが明らかになったが、大溝の造られた時期とは300年余りもの開きがあった。現在の田所集落が、鎌倉時代から継続して営まれてきた集落なのか、それともその間に断絶があるのかは現時点では不明である。しかし、田所集落の北側と東側にも溝が造られている可能性があることが物理探査の結果からも指摘されている。

今後、発掘調査の機会があれば、大溝がどのようにめぐっており、田所集落とどう関わっているのかが明らかになるものと期待される。

引用文献

- 太田芳巳、服部信博、赤塚次郎、鬼頭 剛 1993 「田所遺跡」『(財) 愛知県埋蔵文化財センター年報平成4年度』22-31頁
- 太田芳巳、酒井俊彦、鬼頭 剛 1994 「田所遺跡」『(財) 愛知県埋蔵文化財センター年報平成5年度』14-15・24-29頁
- 葉栗史誌編さん委員会 1986 『葉栗史誌 (神社仏閣編)』208-218・320-333・356-380頁
- 一宮市 1980 「織田信雄分限帳」『新編一宮市史、資料編補遺2』239頁
- 一宮市 1977 「田と畑の新開」『新編一宮市史、本文編上巻』781-799頁
- 1917 『葉栗村志稿』9-10頁